



清々たる心ありて
心ゆくもあはれ

しづかに

きこ

あまのこころ



耳馴集



曰人居士

新まねが待き、ほきき

くもわにのさ守短衣の袖

明く里小林鹿の水をたこせそ

乾入口を 替り酒苑

良火の才屋く 費了凡阿中

舎用

抱儀

桐堂

松什

十水

やるもなれた牛の夕露
 丁 記
 此のけしき旅の支へるも月如秋
 壯 賢
 雪ふとまじりてまじりぬ海魚
 詠 帰
 昼くくは博た樽よく見ゆ所
 松 雨
 思ふも井もいぬるもたきくはそ
 碓 嶺
 世と理の形をせよ観音
 小 叢
 強くく人々曳やぬ松古弓
 曾 見

乾きもまじりて登小及旅路
 氷 狐
 冷然とけり合はるき冬の内
 玄 子
 弱の足本乃は久り来れ
 惟 子
 文者いふは城も京をまの似る月
 六 人
 虫ひといはる中は籠の三ッ罫
 豊 也
 いはるをく出くは裕た泥たけ
 石 波
 家訓一昔ゆめ不自由しり
 老 馬
 見據るのまじりても好むも
 鶴 翁

曲突の坊やと暮むるは是
 旬旬と小館の妻をふらしたる
 画堂の同じく腰をたなまぬ
 行き合も向の遠りし不化仲る
 何度やてもはぬくハ七十
 大北風の寒き裾火に阿くま里
 船に新けく舟橋とりにきり
 今此ある二階も下も去るぬ都

二

か了
 世節
 逃流
 得所
 素瓏
 財息
 聖堂
 山外

誰も上より下に出放影
 ふるの止る庭中ぬに早解里
 唾を足込中たのむ橋中皮
 はみやうと余斗はさる栗丸右
 連し待たしと江戸の形風品
 秋亭も月出るをいけりかく
 山成らうねる並走り雁
 芥々まかさぬと稲の木ぐくし

小圃
 蒼岷
 孝山
 有未
 岩岳
 路方
 巴山
 大之

甥も叔父も肉子指つぬ サツマ 素秋
 看板代字ハきりりわし 淀石助 山骨
 小叔若孫なりて 糸起る駕 亀丸
 もる乳走ノ押くかきたるあしノなき 子輅
 不灰ノある火にノけり決靴 庚午
 魚先ノ久ノし 紗ノ柿ノなる 禾水
 糸瓜の水もノれぬやき 荷乙
 近急乃ノ糸ノの深ノ 割ノの月 月底

三

嘸ハしハもノを枝ノうノしハふ 虚白
 鯨ニ燿ク勿シ子ハむハふハけハりハ 素亭
 清依ハ披ハしハをノ解ハるハ柏子木 菅石
 眼ノろノ中ノふハかんハてハあハのハ限ハなき 鳳朗
 強ハきハ多ハれハ強ハきハよハなハるハ 史千

松島や 雪もいづも 花の鳥
つ 疎おの 山明きの 秋の花
を 凄く なる 花 志あはくも 上
る けも しく 何や 花 志の 花
花 一取そ 立の 船り 雪あり
咲 出さる 山 け なる 牡丹 花
空 風に出 吹せ 花 花 花 花

蕉 雨
雄 剛
左 卯
葵 亭
士 朗
成 美
恒 丸

四

一 くれの 煙り なる 花 花 花
花 花 花 花 花 花 花 花
戸 ぬれ なる 花 花 花 花 花
く なる 花 花 花 花 花 花 花
蓮 咲く 花 花 花 花 花 花 花
老 ぬれ なる 花 花 花 花 花
花 花 花 花 花 花 花 花
花 花 花 花 花 花 花 花
花 花 花 花 花 花 花 花

五 明
巢 兆
乙 二
葛 三
鳥 醉
花 花
花 花
花 花
花 花

名月や家平房れつ観二人	平角
ゆれをやびとれ密林の月	冥
喜天や何思もや東鳴子	宇橋
僧をひもく見えの成る雪の船	素々

六多みさるいまるかや時きさみ
 海ありさる古人のちのちを
 うにありさる結縁す

十三集の言はれしは
もどき立たけは口やうき
半分をまむ仲の大根
頼のまゝぬく物引こま
やうの事てぬけし侍役
伸きれは不つきり肩の骨
娘は右袂をばあも眠る
言通ひしは枕打はさき
唄

七

用子私用子私用子

志くればはるま月のおとこ
枯きつてはあまの木の橋
側のかしこもあせり山伏
石を喰らふまの唄はあたわ
長滞りるの房は津あく
峰は火のつらき燃る初嵐
草にまきぬる家の祓られる
ひとぬきの夏あめ及士に枯れ

用子私用子私用子

孫ねむるもの不自由と思ひり ヲク 西窠
 男手を待てかけしを喜すれ、 ヲク 大々め
 一 おや船を来りし臘の先 京 南溪
 花あに葉けしけりあ牡丹が ミカハ 扇和
 かきとよを添させるとん クルメ 流芝
 雪がと山明れささるほん ハサミ 雨凌
 旅さるほし 京 雁臺
 次風お吹度や 京 梅魚

クニ

蒼ねむるもの不自由と思ひり、 大坂 虚白
 子かき喜けりし アツミ 蕙居
 赤い サツマ 楓下
 拭き エチユ 馬堀
 妻畑 サカミ 市猿
 出 カッサ 核堂
 照 カッサ 嵐湖
 見通 カッサ 息

不^レけ^レや^レ清^レき^レた^レ明^レ珠^レ
 新^レ一^レ交^レ鎖^レ下^レて^レき^レき^レけ^レり^レ
 山^レ流^レ来^レる^レ花^レの^レ目^レの^レ色^レの^レ時^レ鳥^レ
 秋^レあ^レら^レも^レ行^レき^レか^レつ^レや^レば^レお^レれ^レ
 瓜^レ立^レ二^レれ^レお^レま^レん^レや^レ不^レき^レけ^レ
 赤^レき^レ人^レお^レる^レや^レ赤^レに^レ火^レ赤^レ宮^レ
 置^レ流^レ一^レ館^レの^レま^レ石^レや^レ信^レき^レか^レき^レ
 蚊^レの^レり^レ来^レん^レと^レし^レて^レ眼^レを^レさ^レけ^レり^レ
日光 富 梅
日光 枕 流
 鳳 朗
 蒼 峨
 有 来
 月 子
千ヶ瀬 雨 角
廿二 素 秋

坂^レ形^レ車^レの^レす^レる^レ酒^レ店^レの^レ隈^レ々^レ形^レ
 引^レき^レり^レと^レ程^レま^レう^レ菴^レの^レ隈^レ
 蚊^レの^レお^レら^レと^レす^レる^レ森^レの^レ秋^レ明^レ形^レ
 明^レれ^レ坂^レの^レお^レら^レと^レす^レる^レ家^レの^レ庭^レの^レお^レら^レ
 瓜^レ立^レ二^レれ^レお^レま^レん^レや^レ不^レき^レけ^レ
 赤^レき^レ人^レお^レる^レや^レ赤^レに^レ火^レ赤^レ宮^レ
 置^レ流^レ一^レ館^レの^レま^レ石^レや^レ信^レき^レか^レき^レ
 蚊^レの^レり^レ来^レん^レと^レし^レて^レ眼^レを^レさ^レけ^レり^レ
水 ま つ
三カ八 稻 居
三三町 鳳 石
テハ 大 橋
 由 誓
 橋 水
 白 蟻
 茶 静

休むとて遊つたり 燭の才 小 蓑
 一秋能く吟せり 二夜もく語り 曾 見
 吾の気のつらぬ 去るや 竹の奥 丁 知
 しらねども 流りぬる 花の香 良 台
 秋のきこえが 花のや 花の香 和 戎
 子この日いつ 水く 戸口う 那 荅 花
 静のせむし 吐く 舌の 舌の 舌 四 明
 百とえり 春の 花の 四月が 秀 外

三

写にあすぬ おきて 阿ふ 故きが スマ 西 月
 豆音のよみ 舌の 舌の 舌の 東 於 功
 海路もさく 舌の 舌の 舌の 仙 厄
 人の来り 来り 来り 来り 舌の 楚 岳
 庭のさや 舌の 舌の 舌の 烏 津
 舌のさや 舌の 舌の 舌の 悠 々
 ひらくとも 舌の 舌の 舌の 史 千
 馬の子と 舌の 舌の 舌の 亭 々

日向

ういおま方角のほく水鏡ウチオ 蓬雨
 夕雲アキ 雪頂
 栲エチユ 宇弘
 厄介カヒ 嘉乐
 空は餘甘夢の周の影リホ 龍山
 清き大各おも田くくラハリ 松島
 晴るる二ふひヲク 仏孫
 ちれあてるを凌ぬニチユ 茶山

ク田

麦薊カッサ 亀丸
 柳ヲク 相堂
 神カッサ 呂叟
 すヲク 峯岳
 蓮カッサ 荷子
 今ヲク 塘水
 あカッサ 三山
 平カッサ 著莪

初茄子つまむ指にかけり

上毛

左谷

垣根へ出て川へあはれ清水や

炭外

根のぬきたまき石んゆの清き水

アハ

左拳

運まてい来つぬきや船のる

トサ

嵐夕

あぢも涼あええやけ良れ火

イヨ

柴人

尺旦白の奴きとくしつ井戸が

エチコ

ちのろ

六月や船へあはれ酒の縁

エツ中

秀甫

一か内ちへあはれ夕涼み

ヒクチ

一北

ク五

きねあまて志ぬ暑のまぢり

カヒ

益白

たのころい鳴きもあはれ衣の衣

ミナリ

圭布

山風と何れあはれ輪が

笠吏

海

青すれ色もかえぬきりの林

千七

士哥

藤すれきえ都人心中の林

一六

仙兄

魚の血を砂掃りけり今都の林

千崖

松をわたりけり林いさよりり

八十

梅堂

山のふもとに藤をきり天の川

日光

又

船で眼のまを杖束しもの何

アツミ

世岐

ノ六

七夕おぼろもかざりけり

晨支

待てゑる甲もあき林の宿か

ラク

白知

去る露や三つあつる朝しき

日光

山水

都都の明りさく蒼もひかり

ヒセニ

眉山

胡鳥やぬきけり林の上

ヲク

宗狐

けしむねもあつる小籠のさき

きよめ

はくしむるかきけり如常也

一具

吹けり柳灯白もあつる

長サキ

休友

水 瓶
 院 岳
 氷 谷
 一 青
 塞 る
 千 富
 沼 蕪
 牛 烟

クセ

日 向 双 鳥
 カツキ 皎 雪
 ハヨキ 布 隠
 サツキ 由 之
 カツキ 古 溪
 カツキ 呼 牛
 樹 村
 月 底

まねのこまうふお勢うま
 喰ものになつて世の世の運その
 狼狽れお海秋や松もま
 川こしてあい香をきく甘が
 ちる用きして舞れい鳴河麻が
 廣うわて雨きぬけり秋の雲
 一歩つたりにちりぬ松お月
 灯や夜寒のちも勝る口
ヒラキ
ラク
サツマ
イヨ
エチコ
 松軒
 雁塘
 馬年
 山骨
 於翠
 真奇
 素亭
 奇嶂

ク九

掃除して腰巾これと散る極
 多ふれんちまき落されて寝る
 似る歌の多くて月も更になり
 松の蟬ころびとちりて鳴にわ
 候よりときし高きお系すま
 引けを替へ汲へそ枯れ水
 このおれ染へて残るお系が
 三糸ね〜音つえ〜お坐者
大村
身有
上毛
本井キ
エチコ
 素撲
 小坡
 平雄
 西馬
 神童
 二
 三
 護物
 山住

山雀に鬼灯をけりて
 折る葉の匂ひをけりて
 きく煙の匂ひをけりて
 志々木や折るをすれ人の垣
 出さるるをけりて
 小舟日居をけりて
 一才ハメ切る何れ后の月

山 山谷
ウキ 鬼芳
ウキ 翠兄
サカミ 観堂
ウキ 祖文
ウキ 菫水
ウキ 千瑞
ウキ 羽扇

山雀に鬼灯をけりて
 冬道くちをけりて
 冬道くちをけりて
 冬道くちをけりて

ウキ 兎兄
ウキ 更川
ウキ 芦月

冬

志く降雪に見え福も時り也
 息方の木影もあらず初れ
 根もたぐて随分也手い志くれ系
 志くるや小意ひらけ明日里
 乗替へ艱毒ぬき時雨
 かすれ冬のみ地よ言書おこまらけ

ヒタチ
 松 竹
 有 雲
 野 巢
 桃 磯
 正 昇
 洒 入

ソ土

赤いお花をたぐこちし時り也
 時くれとまさう這入らぬ三つはぬ
 野らぬおのよこしりや石落の志
 けあわり冷ら他も氷るま
 一山乃木の葉吹える戸口が
 心三葉れあまり白すたかれぬり
 庭掃く振こたりの鴨み奉
 おももまこ耐ぬた夏の二葉おか

アハ
 冬 宮
ヲク
 心 阿
イセ
 雀 叟
 麻 交
 遅 流
 文 詠
 若 非
 表 詠

見ておれいばあこもまじうか
 入廻り枝乃り多きなり
 待合を出て廣庭や冬此月
 賣家にとるきく松ありふり目
 せき圍る敷やまゐるや川子香
 蓮池もひらりぬれを枯せり
 持よりにユまのりく水心也
 ぶふ合のいつわてある火桶が

キ 子
イタ 羽
 孤采
 宗羽
 詠留
 祖左
 千輪
 松莊
 弄化
 玄子

桑花をや疎凍はくふ雪の
 雪喰ふておる人のちうもきり
 身もや散雪こははりま
 木よりおのりもほろりか
 いつまでもおのりもほろりか
 谷深く深りり木のちうも雪
 記ある根無や雪をもちり
 一きくひまう桑にたるや垣の雪

ヨリ 山
ハ 度
カ 了
下 幻
 夷則
 白桂
 黄山
 養乳
 卓池
 五度
 かつ
 幻芝

樹さうの柿只ひより枯野所 大村 一兮

ふもさや下戸も見えぬかるの客 長 三夜丸

うい強のそ船の旗大氷アより タニハ 湧流

これ後のふられの聲や槽のり ナコヤ 李曠

押ハ明く戸を叩きりう冬此月 豊馬

為る地中為るもあふ多あり 西里

似合一ふる妻や釜の炭俵 木司

此る甚あれいまわけて氷アより 有西

ノ十四

姫はよりおまえの夢ぬ火燵 △サシ 湖山

本所や所しくと推氷 豊山

河の見た奈内りや寺此僕 一肖

お仏るやかもしあふをいふ ヨカリ 不轉

空を舞花根とちや岩俵 ヒタチ 露玉

ふ眼まわて下に括て見る フニラ 路方

風道とあけてたふるや浮森鳥 大坂 逸例

旅りきい人も逢りぬ 大坂 眉岳

菜管ついで年俵も屏風か 并シ 佳年
 きて掃ハ皆々骨折る出立も テハ 稻例
 候橋みも水かはや馬の歌 モミ 田鳳
 布らしくと時梅のつむむゆき ヲシ 大費
 翌見しついであまなう年々 シ 連志
 何よりし先道より一のこれ シ 而後

春

春の来ことしは空を思ひ多 カツキ 采算
 初爰乃あをを見たも水明 カヒ 松翁
 七子三陽をうたかゆみし カ 荷女
 春著に子れ立初系袂 イセ 橘之
 三月日立てくけと春 イセ 菊沼

素紋 五十四
 牛山 ヲク
 鷗里 アハ
 姫山 五十五
 雨邨
 如例 ヒコ
 旬光
 嵐布 五十六

水牛 ミカバ
 松翠 五十七
 兔明
 鹿遊
 惟草
 正阿 三十九
 其松 サツマ
 佳峰 大坂

曳たうかきん賞也小松家
 ちてひてあるるよゆる心余家
 まつ畑も記をあるやせんか
 一いつまをむつーや梅此也
 雀の子抱ひあつたてはれり
 来覚えそ言ふ三郎曰郎介
 松とわて家者一く来にの
 梅くや一才口乃一掃先
 六
 五
 五
 鶴
 道
 和
 白
 系
 頂

ノ十七

那々梅や呉人ふあて折よ
 枝間に余中あつる柳う
 折やよふ心さしうり梅の
 一いつまをむつーや梅此也
 けふも出る折やくるわと梅の花
 幸道里に鶴もあつたは雪解が
 美言にをくや大工のふ44履
 折くそ壁梅あわや成ほり
 二
 丘
 柏
 美
 木
 上
 文
 葉
 冬
 岐
 茂
 推
 南
 幽
 柳
 絲

テハ
 カ、
 上毛
 ヲシ
 セツ、
 カヌキ
 フシ
 京

梅をけりくるわ田をる畑の糸 点 六英
 菽入の尻とて一たる子履が 八 露泉
 柳をち骨と知る枝も形 四 山子
 清きも梅をけりる赤つぎ 五 長流
 い苗のちねあれたにけり梅 三 蕉氷
 いけ屋の小たてに唾をる梅 三 蕉
 人中をもまれて出まの柳 三 石波
 とくありと赤く明てある梅 三 豊也

水草の芽に押れては倒れり 得 以
 すんや梅見かては隅田川 大 鏡
 小梅にまわつてある小やぶ 如 九
 言はた松の葉を光はくこたが 大 梅
 鳴とてう骨鳥風はに立るる守 カ 梅室
 以さくそ由のたのむく氷糸 土屋 且松
 待雨や降くお暇は風情あり 半 系
 新なるそ目もみゆる梅が ヒタチ 雪守

手に筆を執りて之を記す
 河内守の命を以て二月が
 せぬもの之を本名に接木が
 身を返す時重なる身が
 法んて持しちりもまがらひ
 坂口に見てはもて者さす
 赤くははるつる細くは
 海を舟にさしのほるを
 素元
 仙骨
 夜照
 素元
 文象
 黙池
 東圃
 素亮

ノ丸

泥水に片足はくふにふか
 ちるのやまをけきと出た
 見えのある用もあつる
 山吹花のちこも鴉や大根干菜
 あけをての命をてはまて日
 ちんてかててて小田に
 まがらひの多き身はるる
 後にもちも層のたき
 宜山
 素元
 葛古
 荷乙
 素亮
 二晶
 素行
 巴山

湯に水ぬるをこまきて清くま
 二月も雪ふる日あり松の志
 中にも及くまれそまれば
 せしちり扇さるや春心
 名もさるや又はみ流し雪の志
 海棠に半分かちおきこれか
 結の背よついで功炎おのり危
 もとちりよめのかさこま小寒まはす

単例
 碓嶺
 聖堂
 雨堂
 米屋
 杉居
 在例
 羽人

クニナ

冬もあまき義干より雪の志
 芦の葉よすついで魚の光り
 大根や男らこまきちり
 ちりふやち祢をかきこまき
 旅の志やはみ人接りぬ茶の志
 長石やち崎のこまき
 ちりまきちりちり初まき
 松もに植かえてみる様うぬ

正昇
 一
 泉文
 也
 西
 大坂
 林曹
 二

いづれもまゝ筆立かける楳多 ヲリ 鴨
 飛石の上をうり掃くきく イユ 菅居
 社内中きく アハ 大之
 一本の木のや アハ 亦
 芝の ヒセシ 井
 花 アハ 坡
 井 ヒセシ 花

井花雲塙の中 アハ 舎用

ノ五

追加

花 アハ 幡雄
 尺 日向 習之
 炉 サツマ 焦門
 本 ヲリ 智幽
 妻 点 芳英
 水 アハ 可談
 於 アハ 巢居

田を植て房を平言ハ記ある
 うんこ多田に合す言多
 旭きの隅くまの蚊怯る
 言免うゆくかき扇所
 ちね喜此いほも物ま記案が
 沙を乃上に火をたく船場
 下并 在 甫
 江 月
 嗽 浪
 雲 和
 五 木
 豫 逸

蕉分狗中秘押之其如
 年 蕉りき 白人考士
 嘗て家之由るを徒
 人々事多し一集
 年々々々々々々々々々々々

三ノ子ノ海ノ子ノ子
子ノ子ノ子ノ子
子ノ子ノ子ノ子

東 邱 中 氏 印



